武蔵野日曜集会

無的実存
――ヨハネ伝第5章19～47節――

１９８４年４月８日（武蔵野）
小池辰雄

体で聴く　その奥の霊的な現実の中に直ちに入っていく　実存的否定　天的必然と自由は一つ
求めよ、そうすれば必ず与えられる　キリストにおいて顕れた愛　キリストの無的実存　そこ
には聖霊が必ず来る　汝知り給う　我みずから何事をもなし能わず　私の業は神行・神業　キ
リストの名誉となれ　即身即主の現実

【ハネ5・19～47】

19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。22 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。25 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26 これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27 また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。28 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29 善をなしし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。

30 我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。31 我もし己につきて証せば、我が証は真ならず。32 我につきて証する者は、他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。33 なんじら前に人をヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。34 我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。35 かれは燃えて輝く燈火な

りしが、汝等その光にありて暫時よろこぶ事をせり。36 然れど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、37 また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。38 その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。39 汝らは聖書に永遠の生命ありと思いて之を査ぶ、されどこの聖書は我につきて証するものなり。40 然るに汝ら生命を得んために我に来るを欲せず。41 我は人よりの誉をうくる事をせず、42 ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。43 我はわが父の名によりて来りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて来らば之を受けん。44 互に誉をうけて唯一の神よりの誉を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや。45 われ父に汝らを訴えんとすと思うな、訴うるもの一人あり、汝らが頼とするモーセなり。46 若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録したればなり。47 されど彼の書を信ぜずば、争で我が言を信ぜんや』

●体で聴く

今日は大変、大事なところです。これを本当に体で聴けば、ただちに福音の神髄に到達します。体で聴かなければダメですよ。ただ耳、ただ心ではダメ。全存在でということです。

キリストの言葉は人の言葉と違って、「私はこう思う」とか、「こうであろう」とか、そういうような譬きの言葉は一つもない。全部、断定的に権威をもって語っている。だから、「我思うゆえに我あり」なんて、あんなのは哲学的模索の世界の話でね、信仰の世界は、宗教の世界は、一人称・直接法・現在です。未来のことを言っていても、それは現在なんです。すべて現の世界です。現です。だから、私は、「信即現」と言っている。信仰は即、現の世界である。「まことに誠に」、「本当に、本当に」という。この頃よく、「本当に」という言葉を使うけれども、あんな軽い意味で、「本当」なんて言っているのではない。

19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、

という。自分自身では、子は何事もなしえない。それは父がなしつつあるのを子が見るということなしには何もできない。現実に神さまがするということを霊視しているわけです。キリストの神意識というものは非常に明確なもので、それを「父」という言葉で言っておられるわけです。「父」というのは人格的な存在ですよ。仕方がない。人間に分かるように、「父」と言った。なにもお爺さんか何かを思い浮かべているのでも何でもない。

「神は霊なり」

とはっきり、キリストは言っておられるので、霊神であると同時に父神、人格神であるということです。これは離すことができない概念です。

「自分では何もできない」ということは30節でも言っている。

「[30]**我みずから何事をもなし能わず**」

という。もう絶対依存しているんです。シュライエルマッハー（１７６８～１８３４）が、

「宗教は絶対帰依の感情である」

と言った。彼は情感の世界を非常に宗教の本質だと言っているわけです。ゲーテも、

「ゲフュール・イスト・アッレス」（体感は一切である）

と言っている。私は、「ゲフュール」を「体感」と訳す。体で感ずる。単なる情ではない。全存在で感得すること。見るのも聞くのも、言葉を聞くのも姿を見るのもみんな、それをもし「体感」という言葉で言えるなら、この「体感」が一番根底的な意味です。その意味で、「ゲフュール」という言葉は素晴らしい。ドイツ語の「フュール」というのは「触れる」という字です。体に触って感ずるのが「フューレン」という。人間の感覚のうちで一番これが密接なんです。味わうとか、見るとか、聞くとかいうよりも、触れるというのが。人間は歓喜が極まったりすると抱きつくでしょ。あれはみんな「フューレン」の世界です。「ゲ」というのはそういう総体的な気持をもっている。全存在的である。だから、私は「体感」と訳す。あのゲーテの言葉を「体感」と誰も訳さないよ、ドイツ文学の人たちは。私はゲーテの奥を読むからね。

「体感が一切である」

ということです。

●その奥の霊的な現実の中に直ちに入っていく

お釈迦さんも、

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

と言った。

「お前たちが本当に体で感じて、そして今度は、自分でもってそれが体現していかなければ、聴いたことにならない」

ということです。体感が体現していく。体で現じていく。単なる行為ではないんだ、この体現というのは。もっと深い言葉です。そういう意味で「体（からだ）」というのは非常に大事な字です。霊肉渾然たるものです、この体というのは。その点では、ルターの『クリスチャンの自由』もまだちょっと言い方が足りない。

正直、私の『無の神学』は誰も書評が書けない。ある人が実は驚いてしまっている。書けないんです、書く書くと言いながら。全十巻の中で一番大事な本は『無の神学』なんです。特に、第一部の「無の神学原論」というところ。本当は三部になっている。私の心の

中ではドラマチックに展開しているものだから、論理的に展開しないで困るんです。だから、ドラマチックなものですよ。『無の神学』の第二部の「無の神学への道」は第四章の「無教会神学論」までがそうなんで、第五章「三位一体」から第九章「即身即主」までは第三部にすればよかった。分類の仕方をちょっと間違えたよ。第五、六、七、八、九章は第三部としたい。これは本当は「原論」と相呼応するところの内容を持っている。神学はみんなが遠避けるけれども、私の神学は聖霊が吹いているし、熱泉が湧き出ている神学だから、よく読んでください。

体感、体現ということ。キリストはそのようにして見たり聴いたりしている。キリストは体で見ている。見ていることは体で見ている。体で聴いていると――相手は神さまでしょうが――神さまの声や神さまの姿を全存在で見たり聴いていると、そのまま生命がくる。そのまま力がくる。そのまま御霊が臨んでくる。

いいですか。見ることが直ちに、聴くことが直ちに、その実体を受けとることになる。あなた方が私の話を聞きながら、意味を考えていたら、いつまでたっても始まらない。意味を通してその奥の世界に、私がいるところの霊的な現実の中に直ちに入っていくような、そういった聴き方をしていないとね。キリストはそのようにして神さまを聴き、神さまを見ていた。

●実存的否定

「自分では何もできない」

と、はっきりそう言っている。この絶対者をぬきにして何ができるか。「神の子」なんて言ったってダメなんだと。「善き先生」と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまのほかに善いものはあるか」

と。一切のものを全部、神からいただいた。

だから、自分を何ものともしてないことを「無者」だと言っている。第一巻『無者キリスト』はこの第三巻『無の神学』の、ある意味において姉妹篇です。姉妹篇ですけれども、第三巻の方がもっとつっこんで書いてある。第一巻と第三巻を読んだら、もうこれが中心で、あとはどんどん楽に読めてしまう。第三巻はみんな敬遠してしまっている、

「大体、無だなんておかしい。神さまの世界は無だなんて」

と。冗談じゃないよ。私のはキリストを中心としているんです。そのキリストが、「何ものでもない」という者が正に神に充満しているわけです。自分自身は何ものでもない。私たちにとっては神をいきなりにできない。そういった神秘主義じゃないんだから。こっちはキリスト神秘なんだ。

父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。

と。父の為し給うことを見ていると、直ちにその力が、神さまの業（わざ）の根源の力が直ちに入

ってくるから、「為し能う」になるんです。それを見なかったら、聴かなかったら、何も言えないし、何もできない。

「**自ら何事をも為し得ず**」

とはっきりとキリストは言っている。これは体裁で言っているのではない。謙遜しているのでも何でもない。

「自分は正直、ダメなんだ」

と。ということは、全く神さまと一如の世界です。けれども、キリストは人間ですからね、イエスという人間です。我々と同じように泣いたり笑ったり、お腹がすいたり、喉が渇いたりするんだ。人間的な思いもあるんだ。

「**わが意にあらず。汝の御意を**」

なんて言っているんだからね。人間の側は全部、実存的に否定している。これは実存的否定なんです。観念的否定ではない。普通は観念的否定なんだ、みんな。己を無するなんて、観念で否定したってダメだ。実存的否定なんです。虚無でもない。

●天的必然と自由は一つ

本当の自由とは、

「私の意ではない、あなたの意です。自分の中に自由なんてありません」

ということです。自分自身をそのまま自由にしようものなら、そんな自由はわがまま勝手の、きままの、身勝手の自由なんだ。ところが、今の自由主義、日本の民主主義なんて、あれはみんな大体が身勝手主義だ。

ルターは本当の自由をキリストから、聖書からいただいた。若い人たちはこのルターを読めということ。そして、自由が何である本当に知ってもらいたい。だから、『自由の戦士ルター』とでも表題にすればよかったよ、『聖書の人ルッター』(著作集第七巻)なんて書かないで。一番本当の意味は「聖書の人ルッター」なんだけれども、「ああ、また聖書か」なんて言って敬遠されてしまうから。「自由の戦士」というと、「何だ、自由なんて」ということになる。あの表題は間違えたね。本の表題とは大事なものだ。今度、再版にするときにひっくり返してしまおうかな（笑）。「自由の戦士」と副題くらい付けておくよ。

「私は自由だ」なんて、みんな普通は思っている。そんなものはなにが自由かと。自由をも捨てろと言うんだ。キリストは、

「私の自由ではない。神さま、あなたの自由をいただきます」

と言う。自由であろうと、何であろうと全部、

「自分はあなたに徹底的に従います」

と。だから、それを「僕」という。

「言うなりになります」

と。相手は絶対者だから、言うなりになったら、本当にこれは他の何ものにもとらわれない。絶対なる者にとらわれるということは、何ものにもとらわれないということ。それが本当の自由というんだ。天的必然と言ったっていい。天的必然と自由は一つになる。その自由が、神の御意が電光石火のごとくに動いていくと、ある時はそれが偶然のようにみえる。偶然であるかの如くにみえる。偶然もみなこの中に入ってしまう。偶然でない。それが

「生命の御霊の法」

という霊法の世界です。ローマ書8章の始めの方に出ている。

「生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）が罪と死と黄泉（よみ）から自分を解放してくれた」

と。だから、

「私は何もできない。しかし、あなたを本当に見ていると、あなたを聴いていると、何でも言えるようになるし、何でもできるようになる」

という世界になる。そうなると、行き詰まりを知らない。「私の信仰は」なんて、信仰をサムシングにしていたら、そんなものはくたびれてしまう。だから、絶信の信という。

「自分の信仰なんか、そんなものは問題にしなさんな。自分の信仰になんか絶しなさい。そうすると、上から信仰がやってきますから、それが絶信の信です」

と。親鸞の『歎異抄』は正にこの絶信の信の世界です。「弥陀の御もよおし」だとか、「賜りたる信」だとか言っているから。それなんです。

この世界に入ったら、私はもう楽しくて、楽でしょうがないんです、正直。無教会時代にはそういうことは教わらなかったね。無教会は「無教会」なんて言ったってダメだよ、本当は「無信仰」とでも言った方がいい。

●求めよ、そうすれば必ず与えられる

20 **父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。**

と、はっきり書いてある。「愛して」と書いてある。キリストはあなた方一人びとりをその人らしく愛していらっしゃるんですよ、どんな人でも。キリストは、「落ちこぼれ」なんて言って捨てやしない。「落ちこぼれ」なんていう言葉は嫌いだ。けれども、落ち穂拾いみたいに、落ちているものこそキリストは拾う。迷える羊を谷底まで行って、救いあげてくるような牧者だから。誰が愛さなくても、キリストは尋ね求めている。

「尋ねよ、さらば見いださん」

だよ。

「いつも、私はお前を尋ねているよ。だから、必ず見いだすよ」

と。口語訳では何と書いてあるかな。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」（マタイ7・7）

とある。「であろう」なんてではしょうがないよ。「与えられる」でおしまい。「あろう」は

要らん。神さまの方で与えようとしているんだから、「与えられるであろう」なんてキリストはそんなことは仰らない。これはギリシア語だからそんな言い方になる。ヘブライ語は完了、未完了だけだから。未完了形は決してただ、「だろう」を言っているのではない。現在をいくらでも表している。私は新約聖書の大胆な翻訳をそのうちにやりたいと思っているくらいです。

「なんだ、これはギリシア語とだいぶ違うじゃないか」

なんて。違うよ、ギリシア語の奥を訳すんだから。「あろう」なんていう世界は信仰の世界じゃない。

「尋ねよ、さらば見いだす」

ということ。「見出すであろう」なんて言うと、

「私はまだ尋ね方が悪いから、見出せないんだ」

なんて、しまいにはくたびれてしまう。キリストの方からしょっちゅう尋ねているんだもの、見出すに決まっている。

「門を叩け、さらば開かれん」

と。開こうとしているんだから、ちょっとでも叩けば、すぐ開いてくださる。「開かれるであろう」ではない。

あなた方はそれくらいの気合を持っていなかったらダメだよ、信仰なんて言ったって。ことに青年諸君は、そういった凄い直説法の世界に入らないと。全然、力が来ないですよ、「であろう」なんて言われたら。口語訳聖書を読んでいると、こっちは力がぬけてしまう。

私はみんなに憎まれて一向差し支えないんだ、本当のことを言って。キリストだって一人になってしまったんだから。あなた方は、集団意識ではもちろんダメだ。ただし、一人びとりが本ものであったら、その集団は何ものをもっても崩すことのできない集団になる。「日本キリスト召団」というのは、そういう質的な凄い集団でありたいわけです。数なんか問題じゃない。キリストの弟子はたった三、四人で、新約聖書ができてしまったじゃないですか、永遠の書が。この三、四人の本当の御霊の器がこのように書いたら、それが新約聖書になってしまった。

●キリストにおいて顕れた愛

「父は子を愛して」と。その愛はキリストにおいて顕れた愛です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの全福音書はキリストの愛の展開ですからね。特にその「十字架・復活・聖霊」です。もうじき復活節がやってくる。聞かせたい人は連れてきてください。凄いから、今度の復活節は。

「きたりて見よ」

と。「きてごらん」と、あのサマリヤの女が言ったでしょ。文句なしだと。まぁ集会に遠ざ

かっている人はみんなおかしくなる。私は毎回前進しているからね。だから、私は言っている。何が何でも日曜日は――午前だけなんだから――これは何ものをもっても代えることができない時であると言ってやって来なくては。

私たちはキリストに愛されているから。キリストは事実、我々を、罪を贖った。自我をすっ飛ばしてしまった。「罪」というのは我執、エゴイズムだからね。エゴイズムをすっ飛ばしてしまった。そして、

「さぁ、私の生命を受けろ。私の霊霊を受けろ」

と。私は「十字架・聖霊」としょっちゅう言っているでしょ。それがキリストの愛なんだから。祈り入る。祈入です。キリストの中に入る。そうすると、その時に何をなすべきかちゃんと教えてくれる。また、いろんな創造的な知恵も出てくる。非常に創造的な人間になる。自分が空っぽだから。「空っぽ」と言ったって、我々が賜った一切の才能、資質がキリストのものとして展開が始まる。だから、決して単なる空白ではない。もう全部、こっち側の何ものでもありません、あなたのものですと。自分自身が神有なんだ。「神の有（もの）」なんだから、存在そのものが。

それは日曜日にちゃんと来ていれば、六日間の勉強なんかもの凄い力がいくよ。それを忙しいからと言って来なかったらダメだ。私は自分のことを言ったらおかしいけれども、学生時代に翌日が試験であっても、日曜日は勉強しなかった。聖書の世界だ。その代わり早く寝て、午前2時か3時頃起きてグーッと勉強した。一番新鮮だからね（笑）、いい答案が書けるよ。

とにかく、日本は悪いよな。学校の行事を日曜日にやって、月曜に休んだりしている。バカみたいなものだ。土曜にやればいいんだ。

●キリストの無的実存

また更に大（おおい）なる業（わざ）を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。

「怪しむ」というのは、ただおかしく思うということではない。驚き怪しむこと。

21 **父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。**

「己が欲する」と言ったって、キリストは「気ままに」という意味ではない。ちゃんと御意にかなう者です。それはキリストには神さまの力が来ているから、こういう言い方をしている。活けるキリストは活かすキリストである。在りて有らしむる者、生きて活かす者、光りて光らしむる者。みんなそうですよ。

「汝らは世の光なり」

とはキリストが光ってくださるから。こっちには光なんかありはしない。月と同じだよ。太陽の光を受けてほのかに光っている。月は外側で光っているからダメなんだ、内側に光

を入れなければ。キリストの光を内側に入れると、内から発するのが本当の光だ。この中に入るのは何ですか。聖霊です。聖霊は光の霊ですから。光でもあるし、愛でもあるし、生命でもあるし、義でもある。何だっていい。とにかく、聖霊は素晴らしい内容を全部持っている。無限無量の内容を持っている。それが内側に入るから、愛の光が発するわけだ。生命が発するわけだ。キリストの生命を受けるから、復活するわけだ。体の調子が悪かったら、とにかく祈り入らなければダメですよ。キリストの中に自分をグーッと投げ入れる。これがもう秘訣です。

真言密教というけれども、これはキリスト密教だ。空海は、即身成仏の世界だ。この身このまま仏と成る。

「現世でもって仏にならないで、いつ仏になるんだ」

という言葉があったよ、その映画の台詞の中に。あれは単なる易行道でもないし、また難行道でもない。ちょっと難しいけれども。かなり難行の面もある。そこへいくと、とにかく、浄土宗であろうと、浄土真宗であろうと、日蓮宗であろうと、禅宗であろうと、真言宗であろうと、天台宗であろうと――私はもう少し仏教を勉強しようと思っていますけれども――全部、福音の中に入れられてしまう。私の大きな詩の中にはそいつが全部展開してくる。東西を呑んでしまう。

それだけキリストというのは凄い。その中心は、焦点は何かというと、これが無なんだ。キリストが持っていらっしゃった無なんだ。キリストの無的実存なんです。このことは誰も言わないね。無の世界はもの凄く盛んな世界ですから。昌（さか）んなる道なんだ。無即無限無量。ただ「無」という言葉に躓くんだ、みんな。躓いたり誤解したりね。しょうがない。「空」と言ったってかまわない。ただ「無」の方がいろんな意味において解説しやすい。

●そこには聖霊が必ず来る

そのように活かす。我々は活かされる。

22父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣（つかわ）し給いし父をも敬わぬなり。

父と子を、どっち側もちゃんと言っているということは、キリストはもう本当に一つになっているから、そう言うんです。もちろん、もとは父ですよ。「子」は父の現象体だから。父を現象している。現象体です。具体的には、「父」と言ったって、みんな困るんだよ。だから、

「とにかく、私を見なさい。私が全部やってみせる。それは父がみんなやらせているから。私のやっていることを見たらば、それを信じれば父を信ずることになるし、崇（あが）めることになる」

そういうことをキリストはこういう言葉で言っておられる。何も敬われたいために言っているのでも何でもない。全部それは、子を敬うことは、実は同時に父を敬うことなんだよと。父なき子はない。父なき子なんていうのは子でありはしない。子という言葉はもう父を表している。父があるから子がある。これは仕方がない。自然的生命のお母さんがいて子が生まれるというのと違うんだ、この「子」という字は。それは具体的にはマリヤを通して聖霊によって出てきたんだけれども。

24**誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。**

この24節は素晴らしい。そのようにして受けとれば、もう審判に至らない。「子を受けとる」ということは――まだこの時は、キリストは十字架にかかってらっしゃらないから困るけれども、十字架にかかっているキリスト、甦ったキリスト、キリストからやってくる聖霊――

「十字架のキリスト・復活のキリスト・御霊なるキリスト」

この三相一貫のキリストを信ずるということです。また地上におけるキリストの実存全部。これは『無者キリスト』の方に出ている。

「信ずる」というのは、それを全部、体でもって体受すること、信受すること。「信ずる」という言葉はギリシア語でいうと、三格的な言い方をするものだから、「に信ずる」なんて塚本先生が言い出した。日本語で、「に信ずる」なんて言ったってピンとこない。「を信ずる」でいいよ。キリストを信ずるとは、キリストを信受すること。「に信頼する」でもまだ足りない。聖霊は共通項です。聖霊がやってくると、これは共通項だから一つになるんです。聖霊がこなかったら、一つにならない。聖霊が来るのは、十字架でもってすっ飛ばされているから。十字架で自分というものが全部すっ飛ばされて、現在も過去も未来も、我執は全部ありませんと――相対的にはありますよ、私は死に至るまで――その奥の世界にはないんです。それでもってだんだん消えていくわけだ。地上では完全に消えないだろう。だけど、いいんだよ。

福音というのは、救いの確かさというのは、十字架を本当に受けとったときに、そこに無我の境地がちゃんと来ている。我なき境地が十字架で来ている。これははっきりそうです。本当にゼロになっているんです、こっちは。そこには聖霊が必ず来るんだ。これを本当に受けとらないから、聖霊が来ないんです、みんな。「みんな」と言ったら悪いけれども、普通のクリスチャンは。祈りの世界で十字架を本当に受けとってごらん。グーッと体が痺れたりする。それはもう聖霊が来た証拠なんです。異言が迸ったりする。何だっていいよ、その人によっていろいろだから。

「何かしらんけれども、もの凄い力がきました。生命がきました。確かにこれは違います。思い込みでも、自分の信仰でもありません」

ということになる。ペテロが言っているわ。

「自分の信仰でもない。この跛者を立たせたのはナザレのキリストがやったんだ」

と。「我を見よ」というのは、

「わがうちなるキリストを見よ」

ということだから。ありがたいよ。だから、審判に至らず、死より生命に移っていると言う。けれども、キリストの言葉は時々、平面論理でいうと、矛盾したようなことを言ってらっしゃるから、躓かないようにしてくださいよ。

●汝知り給う

25誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。

もう、世の終りはすぐ近くにきているから。

墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。

と。そんなに早く来なかったよ、正直。相対的な時間の上では。けれども、各人の生涯においては、本当に受けとっているときには、その人はたとえ墓に葬られても、もう天界に行ってしまっている。亡骸（なきがら）は墓にあっても。だから、私はお墓参りというのはあまり好きでない。何かもぬけのからみたいで。それはある意味において、お墓に行って、それを覚えることは、人間的な意識としては悪くはないけれども。

「けれども、もうそこには居ません」

ということです。私は墓碑銘に、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

という言葉を刻んでもらおうと思っている。そこへ行って楽しくなるよ、みんな来た人が。

「こっち側は楽しいところですよ、早くきなさい」

なんて（笑）。まぁ冗談ですけれども。まぁそういうことです。もう、61、62年も前に天界に行ってしまった私の兄貴は歳と共に近くなってくる。私がだんだん死ぬときが近くなったからと、そういうことではないよ。

とにかく、もう永遠の生命が地上にあって現に今きているという世界だということです。キリストを受けとるとね。審判に至らない。

26これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。28汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29善をなし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。

さぁ困った。善悪をちゃんと区別してある。善人、悪人と。善を行いし者は生命に甦る。悪人は審判に甦る。甦ってみたが、どっこい、こっちは審判を受ける。甦えらされたら、

もう片一方は審判がない。誰が一体、善人で、誰が悪人なんですか。人は誰もこれを品定めできない。神さまだけが知っている。

「地上におけるその人の全存在が、善であるか、悪であるか」は神さまだけがご存知である。

それでは、どうしたか。盗賊が二人いた。キリストの十字架の左右に。両方とも悪いことをしたから、十字架にかかった。

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらよかろう」

なんて、こっちの奴が言った。別の片一方は、

「さんざん悪いことをして申し訳ない。せめても、覚えてください」

と。そうすると――これは悪を為したんだよ、しかし――

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。キリストのこの言葉をどうしてくれるか。矛盾するじゃないかと。善も悪もヘッタクレもないということになってしまうと。

相対的な善、相対的な悪、これは神さまだけがご存知です。そして、救われて――十字架のこっちは全然審判を受けないだろうか。知らんよ、そんなことは――神さまは一番いいように、そこを審かれる。神さまの審判はどういう審判だか分からない。まぁ、黙示録にあるとおり、大体、この世で悪いことをして金をもうけたり、権勢をほしいままにしてさんざん悪いことをしたり、そういうのがいかに羔（こひつじ）の怒りに触れるかということが黙示録に出ている。そうかといって、戦々恐々として、

「さぁ私は善人だろうか、悪人だろうか？」

なんて、そんな心配は要らん。問題は、

「本当にキリストを信受して、躓いても転んでも、そこに本当に生きようとして進んでいるか」

ということ。

片一方の人はちっとも躓いたり転んだりしないで、よさそうだと思うが、

「どっこい、待て！」

なんて言われる。もう片一方はさんざん躓いたり転んだしたが、

「よし、お前は入ってよろしい」

なんて。どういうところを基準にして、キリストは、神さまはその人を見るかは、誰か知らんや。詩篇139篇の「汝知り給う」というのはそのことです。そういう人間の判断で割り切るようなことができて、善だとか悪だとか言えるようなものではないんです、神さまの判断というのは。要するに、畏れをもって生きることあるのみ。それがどのようになるかはわからん。ただ、本当に十字架を受けとって御霊において生きていれば、それは絶対恩寵における確信がありますから、そんなことは心配はいらん。

●我みずから何事をもなし能わず

30**我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判（さばき）は正し、それは我が意（こころ）を求めずして、我を遣し給いし者の御意（みこころ）を求むるに因（よ）る。**

「わが審判」と言ったって、キリストは結局みんな、神さまの出店でやっているだけの話だ。ただ、

「我みずから何事をもなし能わず」

と、こういう言葉をはっきりと受けとらなければダメです。キリストすら、「我みずから何事をもなし能わず」と言われた。私たちが何かできると思ったら大間違いです。相対的にはできるよ。しかし、相対的にできるなんてことを計算しているうちは、本当の世界には入れない。

「こんなものは何だ」

と。ところが、能力のある人はなかなかこういう言葉が受けとれない。元気のある人は。けれども、それは本当の元気じゃない。元の気というのは神さまの気なんだから。

私は自分の体験ではっきり皆さんに申し上げるんです。本当にキリストの十字架で無とされたら、逆にものすごく力が出てきている。いろんな事にあえばあうほど、逆に力が出てくる。行き詰まらない。いろんな事にでっくわせばでっくわすほど逆に力が出てくる。へこたれない。この無を知ったから。自分がサムシングだと、

「さぁ、このサムシングは、ちょっと弱ったな。もう少しこのサムシングを、10を20くらいにしなくては」

なんて。そんなことを数えていたって始まらん。相手は無限大なんです。無限大の前に、10だの100だの1000だのは何もならない。神さまは無限大、無限無量者です。

だから、私にはこういう御言がとても力になる。

「我みずから何事をも為し能わず。私こそ何もできない。ただ、あなたの御霊の力がさせてくださる」

と。そうすると、相対的なこちらの、ちょうど五つのパンと二つの魚で五千人に食べさせる――もうじきあとで出てくる話だ――そういうちょっとしたものが無限の数になるように、神さまは、こっちを何ものともしないところの小さなものを無限の力にしてしまうんです。

みんな、ある程度は有るんだよ。いろいろ持っている。けれども、これを無理して捨てるんじゃない。こんなものは問題にしない。問題にしないで、受けとるものを受けとると、皆さんが持っているものがもの凄く展開が始まる。賜りたる才能というのは、みんないろいろな種類があるんだ。語学が非常にできる人もあるし、数学のできる人もあるし、国語のできる人もある。いろんな他の自然科学の物理や化学もある。相対的なそれらの才能が限りなく展開を始める。そこにおいて神の栄光が表れる。だから、自分で苦心することは

ない。それを受けとると、それがグングングン展開していく。少年たちが本当にその世界を受けとると凄いことになる。だから、この福音はありがたい福音です。

「我みずから何事をも為し能わずなんて、少しキリストは言い過ぎではないか、少しはできるじゃないか」

と、そんなことを考えているうちはダメですよ。徹底的に何もできない。そんなものはできるかと思っているかと。「０＝100」点になってしまう。そういう気合が分かったかな。

「私は80歳になって、これから15年間かかって詩を書くんだ」

なんて、普通の常識では考えられない。大体、95まで生きられるかどうかもわからない。そんなことは私は勘定にいれてない。

「私には使命があるから必ずやりとげます。というのは、何事をも為し能わずだから、やります」

と言うんです。キリストは、

「やらせるよ」

と言う。あなた方は、自分のやっている世界で何か創作的な、創造的な人になりなさい。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」とはそのことなんだ。何をしてたっていい。

「この道にかけては世界無比だぞ」

というような意味の気持でやってなくては。それはもう祈りの世界にはいったら、グングン変化していくからね。変貌していく。そういう意味で私はヨハネ伝の５章、６章は大好きなんだ。

●私の業は神行・神業

30 **…わが審判は正し、それは我が意(こころ)を求めずして、我を遣し給いし者の御意(みこころ)を求むるに因(よ)る。**

自分は本願を求めているんだと。本願を求めているこちらが霊願である。悲願でもいいよ。

31 **我もし己につきて証(あかし)せば、我が証は真(まこと)ならず。**

はっきり、キリストは言っている。自分のことを証したらそれは真ではないと、キリストはちゃんと仰っているんだ。そうしたら自分は嘘つきになると。

32 **我につきて証する者は、他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。** 33 **なんじら前(さき)に人をヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。**

即ち、洗礼のヨハネが私のことを証した。

「あの人は聖霊をもってバプテスマする人だ。今までの預言者と違うんだ」

と。けれども、もちろんそればっかりではないよ。

34 **我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。**

35 **かれは燃えて輝く燈火(ともしび)なりしが、汝等その光にありて暫時(しばし)よろこぶ事をせ**

り。[36] **然れど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。**
ヨハネも凄い灯火みたいなやつだったけれども、洗礼のヨハネよりも大なる証ありと。

父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業（わざ）は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、

「業」というのは、言葉も行為もどっちも業だ。それが証する。

「私の業は神の行いである。神行、神業である。これが私のことを自証する。身証する。それが本証だ」

と。

「私を信じないなら、私の業を信じろ」

と別なところに書いてある。

無教会では内村鑑三先生以下、祈りで人を救ったような実証を聞いたことがない。ところが、手島君と私になってからはグングンそのことが出てきた。これは聖霊が来ている証拠なんだよね、私の業が。信仰を持っていない私の友人が、手が痺れて薬を飲んでも注射しても治らないと言うから、「そうか」なんて言って、私がちょっと腕を持って、30秒くらいだよ、黙って祈って、

「はいっ」

と。そうしたら、ケロッと治ってしまった。

「あれ、痛くなくなっちゃった」

と。それからもうずっといいんですよ、その人は。一瞬にしてこのキリストの力は働くんだからね。「南無妙法蓮華経」や「南無阿弥陀仏」を百万遍称える必要は何もありはしない。だから、凄いんです、キリストの世界は。それは私が無になっているからです。自分の信仰なんて思ってませんから…（異言）。それはもうキリストだけです。それははっきり働きたもう。

「治るだろうか、治らないだろうか」

なんて、そんなことではない。

「根源の力を与えてください」

と祈る。

牧師さんたち30人くらいが一遍、私の話を聴いて、５、６人が本当に驚いてしまって、

「分かりました。今まで観念だった」

と言った。牧師さんがそうなんだよ。ごもっともで、教会は無難に進んでいくけれども、無難くらいではダメなんです、波風が起きなければ。あなた方の中に波風が起きなかったらダメなんです。本当の世界に入れない。そうしたら、

「何だか知らんけれども、とても楽になってしまった、疲れを知らなくなりました」

ということになる。

聖書の言は――言の奥から呻き叫んでいる――

「この意味がどうだ」

なんて、そんなことではない。そういう気合だから、ドラマだと言っているんだ、単なる教えではないと。

●キリストの名誉となれ

37**また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。**38**その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。**39**汝らは聖書に永遠の生命ありと思いて之を査ぶ、**

「聖書」というのは旧約聖書のこと。

されどこの聖書は我につきて証するものなり。

旧約は私のことを証している。あの文字の奥にみなキリストが隠れているんだぞと。イザヤ書なんかはことにそうです。イザヤ書35章に、

「盲者の目が開け、聾者の耳が開け、跛者が立ち云々」

といろいろ書いてあるでしょ。あれはキリストが全部それを地上でやってしまった。イザヤ書35章の天国的な現実をキリストは地上でもって証して行った。地上に天国を展開しながら天界へ行ってしまった。

だから、福音書は全聖書の、何といっても中心なんです。福音書をポケットに入れて、しょっちゅう読んでいなさい。電車の中でもどこでも。そして、その現実の中に入ってごらんなさい。少し気違いにならなくてはダメだ、皆さんは。この世に対しては、

「神のためには我は狂えるなり」

とパウロが言ったではないですか。あなた方のいらっしゃる会社であろうと、学校であろうと、どこであろうと、はっきりと証人として立っていかないと。遠慮はいらん。世はもう末に近いから。福音の世界は遠慮している世界ではない。私はかなり遠慮してわるかったと思っているくらいです。

40**然るに汝ら生命を得んために我に来るを欲せず。**41**我は人よりの誉をうくる事をせず、**42**ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。**

しょうがないじゃないか、それではと。

43**我はわが父の名によりて来りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて来らば之を受けん。**

いよいよダメだよ、そんなことでは。

44**互に誉をうけて唯一の神よりの誉を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや。**

さんざんやっつけられているね、キリストに。

「神さまから誉れを受けろ。神の名誉となれ、キリストの名誉となれ」と。

45 **われ父に汝らを訴えんとすと思うな、訴うるもの一人あり、汝らが頼（たのみ）とするモーセなり。46 若（も）しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、**

本当の意味でモーセを受けとったならば、そうなんだけれども。「モーセ、モーセ」と言ったってダメなんだと。

彼は我につきて録したればなり。47 されど彼の書を信ぜずば、争（いか）で我が言を信ぜんや』

キリストは一番奥で言っているので、旧約聖書の本当の読み方は、キリストの預言であるという意味で読まなかったらダメだ。そのような意味において受けとらなかったら、どうして私が受けとれるかと。

●即身即主の現実

「即身成仏」という真言密教は多分、景教の影響を受けてやしないかと思われる。ヨハネ伝に非常に近い。キリスト教で我々の福音は即身成仏の世界だからね。キリストに現に救われて、

「もはや審判に至らず、永遠の生命既にあり」

と、キリストがちゃんと言ってらっしゃるじゃないですか。私は、「即身即主」と書いたでしょ。『無の神学』の終りの方に出ている。この身このまま主に即するという。これは聖霊における絶対恩寵の現実だから、そう言うんです。聖霊によるところの絶対恩寵の現実です。もちろん、私たちは相対的な罪びとにすぎない。罪びとにすぎないが、同時に義人――ルターも言っているとおりに、「罪びとにして義人である」ということは――その義人は即身即主なんです。「信仰によって義とされる」というのは、義とされているんです。キリストを全的に受けとると、「義とされている」ということは即ち、即身即主の現実であるということなんです。それがみんな観念になってしまっているからダメなんだ。この即身即主の現実のためには、この十字架と聖霊だと言っている。この

「○の中に十」

の印は「十字架と聖霊」の私の符号ですよ。「十」は十字架、「○」は聖霊です。十字架が中心に、土台になっている聖霊。十字架・聖霊を受けとると、即身即主の現実にあるわけです。絶対恩寵の現実にある。自分を何ものとも思っていませんから、そうしたら、楽になるよ。そして、限りなく展開が始まる。

私はヨハネ伝5章、6章を読んでいて、讃美歌を作った。この讃美歌は今度の『エン・クリスト』第18号に載せます。

A37「われはみ父の」（１９８４年3月8日作）

――ヨハネ伝第5、6章――（一高寮歌「そよぐ橄欖風かおる」の曲で）

1
われはみ父のなすを見て 行うほかに何ごとも
いかで自らなし得んや
み父の力受くるのみ
すべてを父は子に示す
愛すればこそいつにても

2
わが言をよく聴きて
この世に我をつかわせし
父を信ずる人こそは
いのちを得たり永遠の
審判を受けず今にして
死より生命にうつりたり

3
み神のパンは天降りして
生命をば世に与うなり
われは生命のパンなるぞ
我に来らば亡びなし
我を喰えよわれを飲め
わが血と肉に生命あり

4
わが汝らに語りける
言は霊の生命なり
わが血も肉もみ霊なる
愛の生命にほかならず
祈り入りてぞ身に受けて
我と一如に生きよかし

5
イエスはみ神の無者なるぞ
されば我らは無者たれや
主の十字架の賜いたる
無の現実に在るなれば
かくてみ霊は天降りして
無量の力身に溢る